

平成22年 9 月 2 日
 水稻の作柄に関する委員会

水稻の作柄に関する委員会（平成22年産第1回）の意見

1 8月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 気温は6月中旬以降全国的に平年を上回り、日照時間は6月中旬から7月中旬にかけて北海道、東北日本海側、西日本を中心に平年を下回って推移していたが、以降はおおむね平年を上回って推移している。

今後の天候の見通しでは、気温は全国的に平年を上回り、日照時間は北日本を除き平年並み以上と予想されている。

- (2) 本年の水稻は、出穂後の気温が平年を大きく上回っており、登熟や品質への影響が懸念される。

また、日照不足となった地域においては、徒長気味の生育と見られることから、倒伏による登熟や品質への影響が懸念される。

2 次期の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 6月中旬以降、例年にない高温で推移していることから、登熟や品質への影響及び斑点米カメムシ類等の発生状況に留意する必要がある。
- (2) 幼穂形成期以降に高温・日照不足となった地域や穂肥を低減した地域においては、もみ数への影響に留意する必要がある。
- (3) 徒長気味の生育と見られる地域においては、倒伏の発生状況に留意する必要がある。
- (4) 台風及び集中豪雨による作柄への影響に留意する必要がある。

3 次期のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稻の出穂状況は、遅場地帯ではおおむね平年並みとなっていることから、次期のもみ数確定期調査は例年どおり9月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】

水稻の作柄に関する委員会委員

(座長) 染 英 昭	財団法人中央果実生産出荷安定基金協会副理事長
黒 田 栄 喜	国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授
中 園 江	独立行政法人中央農業総合研究センター農業気象災害研究チーム主任研究員
長 谷 川 利 弘	独立行政法人農業環境技術研究所大気環境研究領域上席研究員
平 澤 正	国立大学法人東京農工大学大学院農学研究院教授
前 田 修 平	気象庁地球環境・海洋部気候情報課予報官
丸 山 幸 夫	国立大学法人筑波大学大学院生命環境科学研究科生物圏資源科学専攻教授
山 岸 順 子	国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構准教授

水稻の作柄に関する委員会（平成22年産第2回）の意見

- 1 9月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響
 - (1) 気温は梅雨明け後9月上旬までは記録的な高温で推移し、日照時間は8月下旬から9月中旬にかけて全国的におおむね平年を上回って推移した。
今後の天候の見通し（10月1日発表の気象庁1か月予報）では、気温は引き続き全国的に平年より高く、日照時間は日本海側が平年並みで、太平洋側はやや少ないと予想されている。
 - (2) このような気象の推移・予報からすると、登熟については、おおむね順調に推移するものと見込まれるが、登熟期の高温による粒の充実不足や白未熟粒、胴割米、カメムシ類による斑点米の発生に伴う品質低下が懸念される。
- 2 次期の調査（10月15日現在）に当たって留意すべき事項
 - (1) 登熟期の高温が登熟や品質に及ぼす影響に留意する必要がある。
 - (2) 出穂前の肥培管理や降雨に伴う刈り遅れが登熟や品質に及ぼす影響に留意する必要がある。
 - (3) ウンカ類、カメムシ類などの虫害が登熟や品質に及ぼす影響に留意する必要がある。
特に、西日本ではトビイロウンカの発生が多いと予想されており、発生状況に留意する必要がある。
 - (4) 徒長気味の生育と見られる地域においては、倒伏の発生状況に留意する必要がある。
 - (5) 今後の台風及び集中豪雨による作柄・品質への影響に留意する必要がある。

【参考】

水稻の作柄に関する委員会委員

(座長) 染 英 昭	財団法人中央果実生産出荷安定基金協会副理事長
黒 田 栄 喜	国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授
中 園 江	独立行政法人中央農業総合研究センター農業気象災害研究チーム主任研究員
長 谷 川 利 伸	独立行政法人農業環境技術研究所大気環境研究領域上席研究員
平 澤 正	国立大学法人東京農工大学大学院農学研究院教授
前 田 修 平	気象庁地球環境・海洋部気候情報課予報官
丸 山 幸 夫	国立大学法人筑波大学大学院生命環境科学研究科生物圏資源科学専攻教授
山 岸 順 子	国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構准教授